

A close-up photograph of several ears of yellow corn on the cob, partially charred and sizzling on a metal grill. The background is dark and out of focus, showing the grill's structure.

草 亭 主人

メールマガジンまとめ版

2013/09.10

はじめに

「草生人」とは

「草生人」は埼玉県草加市に密着したフリーペーパー、いわゆるタウン誌です。2012年6月に創刊以来、ほぼ隔月刊のペースで発刊。インタビューを基本とし、お店の紹介だけではなく、生活に密着したテーマに沿った記事や、市内のイベント、出来事などを掲載しています。

合い言葉は「草加再発見」。

部数は現在2500部。ご協力いただいている店舗で配布させていただいています。

「草生人メルマガ」とは

「草生人メルマガ」は「草生人」編集部が制作する「草生人メイキング」メールマガジン。メルマガだけのコラム、編集部日記、取材時のこぼれ話（本誌に載せきれなかったこと）を掲載しています。オリジナルのメルマガは月に3回発行しているテキストベースのメールマガジンですが、3回分をひとつにまとめて読めるようにしました。

スマートホンの場合はePubでお読みください。

なお、今回はメルマガの内容を一部変更したため、2か月分のまとめ版となっています。

草生人関連URL

- 草生人Web : <http://www.asymos.com/soseijin/>
- 草生人編集部ツイッター : <https://twitter.com/soseijin> (イベント情報がメイン)
- 草生人Facebook (写真集) : <http://www.Facebook.com/soseijin>

もくじ

編集部コラム

おもに編集長による日々思っていること

1. 草加に「美術館」をつくろう！という妄想
2. 「ショッピングセンター」雑感
3. 草加のお祭りの変化について
4. 「メールマガジン」のこととリニューアルのこと

編集部日記

イベントレポート速報版+α

1. トラブル発生！！
2. 「ゆったり爽日市庭（そうかいちば）」大盛況！
3. 浅草で父娘活弁士、麻生八咫（やた）・子八咫（こやた）の舞台を堪能
4. 親子で自由研究の凄さ
5. 草加宿場まつりはミニテーマパーク
6. ウォーターフロントおひろめと「チャリティよさこい」
7. 「市展」へ（また）行ってきた
8. 「ふなっしー」で大騒ぎ

起業日記

編集長兼社長による1人会社の「起業」にまつわるいろいろ

- 起業日記その4：最初の「草生人」を作るまで
- 起業日記その5：インターネットをどう使うか

草加小話

じつに彰による草加レポート

1. じつに彰の草加小話：今町工場が熱くなっていること
2. じつに彰の草加小話：「100円商店街」のワークショップ

草加に「美術館」をつくろう！という妄想

前回に続き、草加市の話。

先日、参加しているfacebookのグループで「草加に美術館をつくる」ということについてのやりとりをした。そこで、私自身がどう考えているかを書いたんだけど、ここで少し記録がてらまとめておこうと思う。

あくまで私の個人的な考え（妄想(^_^;)）で、今のところ実現させるために具体的に何か動く、というわけではないので念のため。

趣旨は、『草加にちゃんとした学芸員が勤務する、つまりその道のプロがしっかり運営してくれる独立した美術館・博物館を作りたい。草加のアートと知の拠点をつくりたい』。

実は、「草生人」を作り始めてから、「草加市に美術館みたいなところがあればいいなあ」とは思っていた。

最初に思ったのは、去年初めて「草加市美術展」いわゆる「市展」を見に行った時だ。『市民から公募した日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真』がアコスに展示されていた。毎年公募されて、毎年入賞・入選作品を展示している。ただ、この作品たちは、期間が過ぎたら見ることができなくなる。たぶん、それぞれ作家さんのもとに戻ってしまうのだろう。

最新号でインタビューさせていただいた田島一さんのステンレスアートは、工場のど真ん中にでんと置いてあった。いやこれはこれでいいのだろうけれど、何かのイベントがなければ見られないわけで、とってももったいない。

同じく最新号掲載のため訪ねた「(株)渡辺教具製作所」さんのところには『ミニ博物館』が存在する※。いろいろなタイプの地球儀や天球儀を中心に、ミニプラネタリウム、鉱物コレクション、科学雑誌などの資料が所狭しと並べられていて、私にとってはものすごくどきどきする空間だった（もっと居たかった）。

詳しくは本誌を見て頂くとして、会長の渡辺さんが、草加にはちゃんとした学芸員のいる博物館が無いと嘆いていらっしまったのがものすごく気になった。

そういえばもっと以前に一度、草加に美術館が欲しいと思ったことがある。「特撮美術館」を見に行った時だ。エヴァンゲリオンの監督（今なら「風立ちぬ」主人公の声(^_^;)）庵野秀明氏が館長を務める、昭和の特撮技術を残すための博物館だ。

私自身が昭和の特撮で育った人だから、この博物館は面白かった、というより、心に響いた。で、パンフレットかどこかで、庵野秀明館長が「だれかこの博物館を引き取ってくれないか」というようなことを言っていたのだ。このとき、草加市なら東京に近い、だれか草加市に住む金持

ちが引き取ってくれないかなと妄想したのだ。これだけ特徴的な博物館があれば、観光の目玉になることは間違いない。

facebookでは、クリエイターたちが集まる場所をまず作ったらどうだろう、という提案があった。

お手本はこれ

「つどう つながる つくる KANAYA BASE」

<http://kanayabase.com/concept/>

町の中心にあった廃業したホテルを利用するもので、コンセプトもいいと思う。しかし、個人的には「美術館を作る」方向とは違うのではないかと思った。

これは「町おこし」が目的であって、中心が「人」になっている。

でも、私が思い描いた「美術館・博物館」は、「モノ」の方が中心なのだ。歴史的文化的科学的芸術的なモノ、それをちゃんと管理して、人に見せることのできる空間。それが優先する。

人がメインの場合は、小さな場所から始めて、次第に大きくしていくということができると思うけれど、モノがメインの場合、それは難しいのではないだろうか。

つまり、最初に「ハコ」が必要であるってこと。デリケートな美術品や史料（資料）を管理する場所（建物）と人（学芸員）が。

facebookで書いた内容を引用。

「個人的には、トップダウン方式が理想かなって思うんです。要するに時代に逆行するハコものを作れてことですが、草加市の市民活動は、さまざまな団体がバラバラに活動しているという現状がある。美術館を「最終目的」にすると、空中分解するような気がするんです。でもまあこれは行政からやんなくちゃ無理なので、あくまで理想ですが(^_^;)」

何もしなければ、草加市（行政側）が美術館・博物館を建設しますよ～という方向になることは絶対はない。じゃあ何をすればいいんだろうか。

実のところさっぱりわからない。

今思いつくのは、市内のクリエイターの動向を調べる、市内にあるギャラリーを調べる、「草加市美術協会」や「獨協大学」に声をかける。

東京都周辺、大都市周辺の同じくらいの人口の市で、市立博物館・美術館がある市を探し、そこがどういった経緯で作られたか、現状はどうかなどを調べる。

くらいか。

とりあえずもしあったら、という妄想。

周りにはちょっとした公園っぽいところがあって、そこで「マルシェ」的なイベントが行われていて、片隅にはちょっとした喫茶店があったりして、館内には、草加市にゆかりのある作家さんの作品や、(株)渡辺教具製作所さんで管理されている科学資料などを集めて管理する常設展示室と、さまざまな企画展を行う大小の展示室があって、大きいところでは、市展や、他に東京からも人が来るような有名作家の作品展とか、小さいところでは、草加在住イラストレーター展とかを開催している、そんな風に、行けばいつもアートに触れられるような、そんな場所。

「草生人」でいつか「草加のアーティスト」という特集をしたいと考えている。そのときまでに、もう少し具体的なことを調べてみようと思った。

※(株)渡辺教具製作所 ミニ博物館

<http://blue-terra.jp/mini.html>

※館長庵野秀明 特撮博物館

<http://www.ntv.co.jp/tokusatsu/>

「ショッピングセンター」雑感

今回はちょっととりとめないことだけど、ご容赦を。

夏に出身地である岐阜市に行ってきたことは以前書いた。目的はご先祖さまのお墓参りだったが、私自身が子どもの頃育った町ということで、観光地ではなかったが、通った小学校とか、よく行った商店街（柳ヶ瀬）も散歩した。

で、ちょっとびっくりしたのが岐阜随一のアーケード商店街だった「柳ヶ瀬」が、半分以上の店が閉店状態になっていて、いわゆるシャッター商店街化していたこと。岐阜から関東へ引っ越したのが1973年で、ちょうど40年前だ。

・柳ヶ瀬

[http://ja.wikipedia.org/wiki/柳ヶ瀬_\(岐阜市\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/柳ヶ瀬_(岐阜市))

私が岐阜で生活していた頃は、食料雑貨以外はたいてい柳ヶ瀬に買いに行っていた。映画館もいくつかあって、「東映まんが祭り」「東宝チャンピオン祭り」は柳ヶ瀬の映画館で見っていた。人が多くて活気のある時期の記憶しか無かったから、久し振りに訪れた同じ場所がテレビでよく見る淋しげな風景になってしまっていて、言葉を一瞬失った。

何か現実でないような気持ちになった。

テレビなどでも取り上げられていたお化け屋敷（山口敏太郎プロデュース・柳ヶ瀬お化け屋敷「恐怖の細道」）も見かけたが、お盆だったせいか、そんなに賑わっている感じではなかった。人がバカ多い東京近辺を見慣れているからかもしれないけど。

また、柳ヶ瀬付近の道路も、妙に淋しげというか、やけにだだっ広く感じると思ったら、当時は当然のように走っていた路面電車と線路がさっぱり無かったことに気がついた。

シャッター商店街になった理由を気になって調べてみた。直接の原因は、郊外にショッピングセンターが出来たかららしい。

柳ヶ瀬は、名鉄新岐阜駅から近い岐阜市の中心地にある。市役所や観光地の金華山の麓にも近い。以前は市内全域からここに買い物に人が訪れていたのだと思う。

しかし、1979年、1988年、2000年に中心から少し離れたところ（郊外）にショッピングセンターが登場。客足が落ちて、平成に入ってどんどん衰退したらしい。2009年には「新・がんばる商店街77選」に選ばれている。

・新・がんばる商店街77選

<http://ja.wikipedia.org/wiki/新・がんばる商店街77選>

ただ、人口自体はそれほど減っていないようだ。人口構成が日本全体と同じように高齢化して、買い物人口が減っているってことなんだろうか。

・岐阜市の人口推移（1970年後半から40万人ほどで推移）

<http://demography.blog.fc2.com/blog-entry-743.html>

調べていくうちに、私の通っていた中学校が去年閉校になっていたことがわかった。生徒の人数を確認してびっくりした。一番多いときは1800名、閉校時は300名。通った小学校も統合されて名前が変わっていた。でも全体の人口は同じ。

よく聞く話だが、自分の住んでいたところの具体的な数字を知って、ちょっとぞわっとした。

さて、ショッピングセンターネタで最近話題になっているのが、過疎化したショッピングセンター。

・滋賀県最大級の大型モール・ピエリ守山の過疎化がヤバすぎる

<http://matome.naver.jp/odai/2137880721958788101>

<http://www.watch2chan.com/archives/32836817.html>

滋賀県の琵琶湖畔にある、最初は200もの店舗が入っていた大型モールだ。

リンク先を見ればその凄さがわかる。規模的には「ららぽーと新三郷」と同じくらいだと思うが（面積と店舗数で判断）、その中で10店しか今営業していない。店舗がそれなりにばらついているので、店内の照明はついている。ちゃんと公式サイトもあって、更新されている。

2013年夏に新たな店舗が入るという情報がネット上にあったが、すでに今年の夏は終わっているので、どうなっているかわからない。

ここが過疎化したのは、ご近所にいくつもショッピングセンターができたからだという。それと、交通の便が悪い。地図を見てもそれは明らかだ。利用する人間の数が限られているんだから、ご近所にいくつもできたらそちらに取られるのは当然なのに、なぜそんなことになったのか、よくわからない。

そういえば「イオンレイクタウン」は絶好調らしい。

今期ドラマ「齋藤さん2」では毎回のようにロケしているし(^_^)、イベントも多い。映画館も入っているから、1日中いられる。湖もきれいだしね。

ただ、それまで別のどこかで買い物をしてきた人がイオンレイクタウンに行っていると考えると、草加市内の商店はけっこう影響をうけているんだろうなと思う。

ショッピングセンターになくて、「商店街」にあるもの。
それは何だろうな。

参考)

来るべき社会問題 ショッピングモールの撤退について

<http://concretism.hatenablog.com/entry/2013/09/15/001253>

ピエリ守山

<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピエリ守山>

・岐阜のショッピングセンター

カラフルタウン岐阜 ゲームセンターとTOHOシネマズ岐阜

<http://www.colorfultown.jp/>

イオン柳津店

<http://www.aeon.jp/aeon/yanaiizu/>

マーサ21 イオン、トイザラスなどとスポーツ・アミューズメント施設がある

<http://www.masa21.co.jp/>

草加のお祭りの変化について

先日、神明庵でちょっと雑談したときに、お祭りの話が出た。「市民まつり」と「宿場まつり」と「ふささら祭り」、そして地元神社のお祭り。それぞれ変わってきてるね、という話。

私は草加生まれではなく、20年ほど前に引っ越してきた。

長女が1才に満たないころだ。彼女が来年、成人する。ということで、お祭りとの関わりは子どもの成長とひも付いている。

まず係わったのが、子どもが楽しめるご近所のお祭り。草加小学校の学区内なので、八幡神社祭禮（高砂2丁目）と神明宮大祭（神明1丁目）が楽しみだった。PTAによる夜のパトロールにも参加した。

子どもたちだけでいくらかお金を握りしめて遊びに行く、こういうお祭りっていいなと感じたもんだった。

しかし、今は露店の数があきらかに減っていて、かつての賑わいが無い。

その後、小学校で子どもがバトン部や鼓笛クラブ（今は金管バンドクラブ）に入っていた関係もあり、「市民まつり」に係わる事になった。そう、パレードの参加だ。

初めて参加したときは、松原遊歩道に軒を連ねた露店の数の多さに圧倒された。橋から見る夜の露店の灯りの美しさが幻想的で、感動した。

ただこの「草加市民まつり」、平成19年（2007年）に行われた第30回を最後に、「草加ふささら祭り」として生まれ変わる。というか、名前が変わったと同時に、「宿場まつり」と同時開催となって、編成し直された。

それ以降、小学生の鼓笛隊／金管バンドのパレードは、「ふささら祭り」から、「草加宿場まつり」へと参加の場が変わる。

以前「市民まつり」で行われていた大名行列（時代行列）や交通安全・防災パレードも「宿場まつり」に引っ越す。

「宿場まつり」は平成15年（2003年）から、『「今様・草加宿」地域再生のプロジェクト』の1つとして開催されているお祭りで、今年は11回目。

最初の頃の記憶があまりないのだが、ここ3年くらいだんだんと賑やかになり、コンテンツ（出し物）も充実してきたような印象がある。

特に去年は第10回目という節目でもあり、盛りだくさんなイベントがあったのだが（去年の草生人11・12月号参照※）、台風接近でバタバタ終わってしまったのが残念だった。

今年のプログラムが今手元にあるのだが、草加駅から旧日光街道沿いで、細かいイベントがものすごくたくさん行われているのがよくわかる。

カーソンプラザではウルトラマンギンガショー+α、街道沿いでは草加どどん鼓連盟（市内複数の太鼓団体の連合体）による太鼓の演奏と、街角ライブ「六丁物語」という、1丁目から6丁目まで6箇所でのさまざまな音楽演奏があるし、武蔵野銀行の向こうでは

「はいから横町グルメ市」、草加小学校では奥の細道物産店やミニSL……。

ただ、気になったのが去年駅前を人で埋め尽くしていて感動した「御輿かつぎ」の予定が入っていないことだ。

あれれ？

さて、「ふささら祭り」。

「ふささら祭り」は、市制50周年を機に、いくつかのお祭りをまとめたイベントだ。平成20年（2008年）から始まった。最初に書いたように、初回は「宿場まつり」と合体していた。

「商工会議所まつり」と「モノづくりダイレクトセール」、文化会館での「文化の広場」、松原団地東口通りの「パイン・ジャズ・フェス」、そして獨協大学の文化祭「雄飛祭」、川口法人会による社会貢献活動（落語など）、「子ども駅伝」など。

そして、メインイベントは「第3回 踊るん♪よさこい」だ。去年も35チームが参加。左岸広場のステージも「よさこい」で埋まり、様々な賞が授与されかなりの盛り上がりを見せていた。

草加ふささら祭り

<http://www.city.soka.saitama.jp/cont/s1401/a09/03.html>

草加よさこい振興会：「踊るん♪よさこい」のレポートがある

<http://www.soka-yosakoi.com/Pages/default.aspx>

ちょっとネットを検索してみたら、「草加市民まつり」のページを発見した※。テーマが「子どもたちにふるさとを」。

このテーマは今「宿場まつり」のものになっている。

つまり、「草加市民まつり」は地元の人に参加して楽しむお祭りで、その精神は「草加宿場まつり」に受け継がれていることになる。

一方「草加ふささら祭り」は他の地域からの人を「おもてなし」する草加の観光事業。

位置づけが違っているってことだ。

かつての「市民まつり」では、左岸広場のステージでさまざまな市民による出し物をやっていた時期があった。そのとき娘が参加したダンス発表会の記憶がある。

まあ、「市民による出し物」は地元民にとってはハレの舞台だが、「観光」じゃあないもんなあ。その代わり、宿場まつりになって、沿道でさまざまな団体がいろいろな出し物をしている状況になっている感じが。

ちなみに、「市民まつり」から「ふささら祭り」になって、ちょっと残念なことがある。

それは、あの松原遊歩道を埋める圧倒的な露店・出店が、午後5時ごろで終わってしまうことだ。少なくとも一昨年、去年はそうだった。「市民まつり」の頃は、普通の地元の祭礼と同じく、夜8時ごろまでやっていて、「太鼓橋の頂上から眺める露店の幻想的な光の連なり」を見ることができたが、それが無くなってしまった。

地元のお祭りではなく、昼間がメインのイベントなので仕方が無いのかな。

※補足) 2013年の草加ふささら祭りでは、さらに露店の数が減っていた。時間制限がある上、左岸広場では飲食店や有志団体による飲食販売の模擬店が大量に出ているため、そちらの方が「安くて美味しい」状況になっていて、客が減っていたのではないかと思う。イベントの秋だ。儲けが無いところで店を出す必要もない。かくしてどんどん露店は減っていく。来年はほとんど無くなるのではないだろうか。淋しい限りだ。

だらだら書いてしまったけれど、ここ10年でちょっと混乱していた「草加のお祭り」も、夏の「よさこいサンバフェスティバル」、秋の「宿場まつり」「ふささら祭り」と、コンセプトとかコンテンツの方向性とかがしっかり定まっている感じがしているので、今の子ども達には、ちゃんと記憶が残っていくだろうと思う。

きっと「草加はよさこい」というイメージも、だんだん定着してくるんじゃないかな。

あとは、地元のお祭りがもうちょっと賑やかになってくれれば、いいんだけど。

※草加市民まつり

<http://matsuri.sokacity.ne.jp/>

過去のページなので、リンク切れになっていたら申し訳ない。

「メールマガジン」のこととリニューアルのこと

いろんなところに書いているけれど、このメルマガの読者は非常に少ない。

「草生人」のWebページや本誌で告知しているが、読者はまったく増えていない。って、増えていないここで書いても仕方が無いのだが、その点についてスタッフと話していたら「メールマガジンという形態は衰退していると思うからやめた方がいいのではないか」という話になった。

世間一般的にはメールマガジンは衰退したという感覚なのかな。

私は「衰退」しているとは思っていない。

多分2009年ごろにいったん衰退し、その後電子書籍の広がりと同時に、コンテンツ販売のひとつの形として息を吹き返していると思う。

まあ、従来のテキストタイプメールマガジンのようなものはなくなりつつあるとは思ってるけど。

「メールマガジン」と「衰退」でGoogle先生に検索してもらうと、2005年から2010年くらいに、「衰退」のキーワードが入る記事がある。

たとえば、何かの商品を売るためのメルマガ、広告としてのメルマガは効果が薄れてきてるだろうから、少なくなってきたいるだろう。それに、テキストオンリーのメルマガも、少なくなってきた。

草生人メールマガジンで利用している「まぐまぐ」は、基本的にテキストかHTMLメールという、「衰退している」と言われているインターネット黎明期からある形のメールマガジンの配信サービスだ。

しかし、今注目されている「メールマガジン」という形態は、「電子書籍」と繋がっているところが以前と違う。電子書籍統合型みたいなサービス。コンテンツを有料配信するということ。

たとえば、ブログとメルマガが一体化して、登録するとメールマガジンのように読める『ブロマガ』。これはニコニコチャンネルの1サービス。

→ <http://ch.nicovideo.jp/blomaga>

また、【受信箱に本が届く】というキャッチコピーで展開している『夜間飛行』

→ <http://yakan-hiko.com/>。

有料メルマガがちゃんとビジネスになることを最初に示した（と思う）「堀江貴文のブログでは言えない話」※や、総合雑誌にひけを取らない充実した内容の「津田大介の「メディアの現場」」※などは、複数のメルマガスタンドから出ている。

これらは「電子書籍として読む」ことが意識されていて、テキストだけではなく、電子書籍の標準フォーマットであるePubファイルなどをダウンロードして読むようになっている。

たとえばiPhoneでは標準でiBooksというePubファイルを読むアプリが入っているから、ダウンロードしたときに「iBooksで開く」を選ぶと、そのままiBooksの本棚に並ぶ。

実際私のiBooksの棚には、「メディアの現場」という本がずらりと並んでいる。

で、何がいたいかというと、実は「草生人メールマガジン」は、こういう形にするのが目標だった。

ちゃんとしたコンテンツを作って、スマホで気楽に読める「草加の電子雑誌」。

ePub版を同時並行で作るテストもしてみた。

しかし、この目標はふたつの理由で頓挫した。

1つ目は、本誌と同時並行でオリジナル記事を制作することの無理（スタッフ不足）。

2つ目は、読者がまったく増えなかったこと。

ユーザーが増えて利益が上がれば、依頼原稿を増やすなり、本誌と連動して記事を組むなり、企画を考えることも出来たのだが、そこまで行くことができなかった。

もちろん、「有料化」したこと自体というか、前提条件に無理があったことが最大の理由だが。

以前も書いたとおり、「草生人」そのものの知名度が低過ぎること。そして、「まぐまぐ」という、一般ユーザーからしてみれば未知のサービスを使ったことがそれに拍車をかけたというか、そんな感じだ。

見切り発車で利用している「パブー」も、こちらはかなりマニアックというか、PTA会議室で聞いても知っている人いないよね的なサービスだ。

ただ、試し読み設定をすることで、スマートフォンからも読めるように設定できること、ePubファイルを自動生成してくれる点から、多少は読んでくれる人いるかなとは思っていたんだけれども……………。

ということで、このままではにっちもさっちもなので、メールマガジンなどの電子系のコンテンツを構成し直すことにした。

ひとつは、現在の草生人メルマガに掲載している「編集部日記」と、依頼原稿、イベント情報などを掲載した無料メールマガジンの創刊。

とにかく「有料」が最大の壁なんだから、とりあえず【無料】で出して、ちゃんと宣伝して、読んでもらわないと……………。

ふたつめは、現在の有料メルマガに「草生人本誌記事のテキスト版再録」をすること。「編集長コラム」「草加小話」はこちらに掲載。

そして、現在まとめ版として出している「草生人メルマガまとめ版」は、無料と有料ふたつの

オリジナル記事を読みやすく再編集し、とりあえずパブーの試し読みをうまく使って、なるべく多くの記事を読んでもらうようにすること。

(本当はiBooksで簡単に個人出版できるようになってくれれば1番ありがたいんだけど)

11月から順次開始する予定だけど、どこまでできるか。

次号10月25日号では、草生人の過去の記事テキスト版再録を試す予定。

さて、タイムリミットは近い。踏ん張らねばってところかな。

※

「堀江貴文のブログでは言えない話」

まぐまぐ：<http://www.mag2.com/m/0001092981.html>

ブロマガ：<http://ch.nicovideo.jp/horiemon/blomaga>

夜間飛行：<http://yakan-hiko.com/horie.html>

他にもいくつかスタンドあり。月840円。

※

「津田大介の「メディアの現場」

まぐまぐ：<http://www.mag2.com/m/0001334191.html>

夜間飛行：<http://yakan-hiko.com/tsuda.html>

メールマガジンは基本的に当人による原稿がメインだが、「メディアの現場」は、津田氏の原稿ではなく、津田氏が選択したさまざまな記事が掲載されている。もちろん本人の記事もあるけれど、インタビュー文字おこしや講演会のまとめや、スタッフによるレポートなどバラエティに富んだ読み応えある記事が並ぶ。これで月630円。

トラブル発生！！

■印刷業界の人じゃないとわかりにくいかもしれませんがそこはご容赦m(__)m■

今回の「草加の元気人」は田島一さんにご登場いただいている。

最近毎日新聞に記事が掲載されたけれど、それ以前も、草加のまちづくりWebマガジン「SOKER」、「草加いいところnet.」と、インタビュー記事が多い。もちろん、「広報そうか」にだって登場している。

今回のインタビューは、田島さんが主催としてかわる「ゆったり爽日市庭」というイベントがらみで取材させていただいた。というか、取材をお願いしたらちょうど「爽日市庭（そうかいちば）」を企画中だった、という形。

で、「爽日市庭」の開催日は9月21日。インタビューは7月下旬で、夏がはさまるものの（去年事務所の暑さにやられて仕事はかなりストップしていた）、断熱シートを貼ったりすだれを設置したりと、それなりの対策をしたから大丈夫だと思ったのだ。だが、甘かった。去年以上の酷暑に、そんな小手先の対策は役に立たなかった。3階建ての3階西側の部屋は、ほぼ1日中太陽を浴び続けるため、エアコンの効きが悪い。

もともとエアコンの室外機が変なところにあるのでいまひとつだったのだが、今年いくら設定温度を下げても30度以下にならず、ただでさえ暑い夏、仕事の能率は落ちたのだった。

ということで、なんとか今週末のイベントには間に合いそうなギリギリな時間にデータ入稿をすることができてホッとしていたとき。

ふと届いたメールを見ると「データ不備」の文字が。しかも当日納品〆切の30分前。

内容は、「InDesign（草生人のデータを作っている高機能ワープロ的なソフト）にダイナフォント（ダイナコムウェアというところが出しているフォント（字体）シリーズ）を使うと文字化けるのでアウトライン化（文字のフォントデータのままでなくて、イラストのデータに変換すること。）してね」という内容。

まあ「データおかしくなってるから修正して再入稿してね」ってこと。

トラブルの中身については、そういえばそんな話聞いたことがあるなど、Webで調べた。たしかに「アウトライン化」という作業が必須らしかったorz

急ぎ連絡すると、「修正して再入稿してください、〆切は5時ですが5時半までは待ちます。」とのお返事。今まで1年半使っていて一度もエラーが無かったため、スルーしてました(T_T)と泣きついて意味がないので、記憶をたよりに必死にアウトライン化、再入稿。

〆切をすぎると、納期が1日ずれてしまうので必死だった。

さて、これで大丈夫かと担当者に電話したが、別の電話に出ているとつかまらず、そのまま2

時間放置プレイ。

ようやく連絡があって、今度は別の文字がおかしいという。

「いやそんなことはないですよ、それAdobeのフォントです（InDesign もAdobeの製品なので、相性問題は無いはず）」と伝えたら、「印刷機なら大丈夫かも。少し待っていて下さい」と。

結局、印刷機の方はOKで、どうやら担当者のマシン上では文字化けていた様子。

うーむ。実際にはどうだったんだろうか。振り回されちゃった感があるけど。

しかしデータのトラブルは大変でっす。

格安印刷サービスってこの世にたくさんあるけれど、DTPのことをほとんど知らずに使った場合、いろいろ大変そうだなってつくづく思う。

それに、今回は自分自身のスキルについてもちょっと反省した。

もともと今使っているAdobeの「InDesign」の操作は会社などで覚えたわけではなく、完全に自己流。だから、仕事としてDTPをこなしている現場ではたぶん周知の事実であることを、知らなかった。

もっとちゃんと情報を集めておかないと。。

・草加いいとこnet.「溶接アーティスト 田島一さんにインタビュー」

<http://soka-etoko.com/blog/?p=354>

・SOKER インタビュー 「田島製作所経営 田島一氏」

<http://soker.jp/1860/>

「ゆったり爽日市庭（そうかいちば）」大盛況！

9月21日土曜日、草加駅西口丸井先の「TSCボードステージ」で「ゆったり爽日市庭」というイベントが開催された。ちょっとおしゃれな西洋市場。美味しい食べ物があって、テーブルと椅子があって、アコースティックな音楽のある空間。

「おしゃれで落ち着くちょっとした異空間を作る」というねらいはしっかり達成していたと思う。

最新号の「草生人」には、主催者メンバーである田島一氏にインタビューし、「爽日市庭」に対しての思いを語っていただき、広告も出していただいたのだが、発行が開催日ギリギリになってしまい、あまり力に（いやほとんど力に）なれず申し訳なかった。

この場を借りて改めてお詫び申し上げます。

この「爽日市庭」、ともかく大盛況だった。開店時から人が絶えず、フラップジャックスの「ヒレカツサンド」は昼前にはすでに売り切れ。チャヴィペルトの「ベジデリ」に入っていたお稲荷さんも早々に無くなり（おかずはなんとか買えました）、バラッツメタさんのカレーも午後2時ごろには売り切れていた。

もうひとつちょっとびっくりしたのは、草加市の町おこしに関わる人（いわばキーマン）が大勢訪れていたことだ。田島さんは「ともかく始めることが大事」とおっしゃっていたから、今回はある意味プレゼンテーション的な意味合いもあったかもしれない。田島さんはずっと爽日市庭にいて、次々と訪れる人と話し込んでいた。これからの「爽日市庭」について、いろいろと思いを巡らせているのだろうと思う。

次回は冬とのこと、今度は売り切れないうちに買わなくちゃ。

・ 爽日市庭

<https://www.facebook.com/sokaichiba>

※出店していた店

・ Chavi pelto チャヴィペルト

<http://www.chavipelto.co.jp/>

・ フラップジャックス

<https://www.facebook.com/soka.flapjacks>

・ オーダー焙煎 珈琲豆専門店 Kopi Luak

<https://www.facebook.com/coffee.kopiluak>

・ Bharat Mehta（スパイス番長 バラッツメタ）

<https://www.facebook.com/bharatmehta84>

※音楽 : citta (秋元勇気)

<http://citta0810.exblog.jp/20250527/>

浅草で父娘活弁士、麻生八咫（やた）・子八咫（こやた）の舞台を堪能

（レポート：じつに彰）

9月21日から23日の3日間、浅草寺の西側、奥山おまいりまち商店街の一角にある演芸場「木馬亭」で、「浅草活弁士祭り」が開催された。

「活弁士」とは、大正から昭和にかけて映画館で上映されていた無声映画、いわゆる「活動写真」において、スクリーン脇で弁舌巧みに語りや説明をつける弁士のことだ。正式には「活動写真弁士」だが、「活動弁士」「活弁」などとも言われ、大活躍していた。

だが映画の技術が進歩し、音声が入ったトーキーが普及するにしたがって、弁士たちは廃業や転身を選ばざるを得なくなった。

そんな中、この平成の世にも、ほんの数えるほどだが現役の活弁士が存在している。草加市在住の麻生八咫（あそうやた）さんとその娘、子八咫（こやた）さんの2人も活弁の王道を現代に伝える活弁士である。

今回の「浅草活弁士祭り」は、チャールズ・チャップリンの傑作無声映画『サーカス』『街の灯』『モダン・タイムス』他を、麻生八咫さん・子八咫さんの父娘共演による活弁つきで上映する企画だ。

筆者は23日（月・祝）の昼の部、『街の灯』を鑑賞した。

浮浪者チャップリンと盲目の花売り娘、そして金持ち紳士とのやりとりを中心に展開するコメディ。もともと声がない映画なので、軽妙なアクションで笑いを生み出す演出が突き詰められている。

たとえば賭けボクシングに出場させられた場面。チャップリンは敵ボクサーを怖がり、レフェリーの後ろに隠れてレフェリーと同じ動作をして逃げ回る。

敵ボクサー、レフェリー、チャップリン3人の見事にシンクロしたダンスステップのようなアクションは、3人の至極真面目で必死な表情、そしてしつこいほどの繰り返しもあって、会場が爆笑に覆われた。

麻生父娘の役割分担は、ナレーションと花売り娘役が子八咫さん、その他すべてが八咫さんとなっていた。つまりチャップリンや金持ち紳士はもちろん、花売り娘以外の女性の声も父が担当したのだ。

八咫さんの技術は、素人目にも相当な高さであることがはっきりわかった。登場人物ごとに声

色を変えているのは当然だが、会話の応酬では瞬間的に声色の種類をスイッチングしている。言い争いのような激しいやりとりでは、二役の声がかぶったような錯覚さえ覚える。

子八咫さんは花売り娘の情感を静かにそして熱く表現した。舞台上の子八咫さんを見ると、表情でそして全身で花売り娘になりきっているのがわかる。そう、活弁士は見ても楽しい。活弁は舞台芸術なのだ。

活弁には、映画を解釈してセリフを作る行為が必要である。

『街の灯』の美しいラストシーン。手術が成功して目が見えるようになった花売り娘の前に、浮浪者ながらも娘を援助し続けた恩人チャップリンが現れる。娘はチャップリンに1輪の花を渡し、手を握る。娘はチャップリンを見つめている。そこに子八咫さんがセリフをかぶせる。

「あら泣いていらっしゃるの？」

そのあとに映像では黒に白抜きの字幕が挟まる。「You？」と書かれている。

子八咫さんが「あなたなのね？」と語る。

麻生さんはこの場面を、チャップリンが泣いていることがきっかけとなって彼が恩人その人であることがわかったと解釈して、あのような台詞演出を施したのだろう。

活弁士は、映画を再解釈して過去の名作を蘇らせる創造活動を行っているのだと、今回の『街の灯』活弁体験で理解できたような気がする。

娘の麻生子八咫さんは、なんと10歳の若さでこの浅草・木馬座において活弁士デビューしたそう。あれから17年も活動しているのにまだ27歳。父親から「お前は神器晩成」と励まされてきたそうなので、この先がますます楽しみである。

※麻生やた☆子やた本舗

<http://www.katsuben.com/>

親子で自由研究の凄さ

9月29日、「草加市内小・中学校科学教育振興展覧会」（通称「科学展」）が草加小学校で開催されるというので行ってみた。

要するに小中学校の夏休みの宿題、「自由研究」の発表会だ。それぞれの学校で優秀な作品が展示されている。小学校36点、中学校34点。

こんな形で他の生徒の自由研究を見ることができる機会があることは、子どもがずっと市内小中学校に通っていたのに知らなかった。というか、選ばれた人には連絡が行くだろうから、選ばれなければ知る機会もないってことだろう（実は学校の表題の展覧会があるというおたよりが配付されていた。が、そのおたよりのどこにも「夏休みの自由研究の発表会ですよ！」ということが書かれていないのだ。前提条件なのだろうけれど、そこを伝えてくれないと、知る機会の無い人はまったく知らないままになるというこった）。

さて、全部をざっと見てほおおっと思ったのが、小学校の方がいろいろな面で凄かったことだ。

この展示会は「科学振興」という名前が付いているだけあって、一つ一つの研究発表に評価がある。その項目は「自主性」「創造性」「科学性」「信頼性」と、さらにそれに具体的な「研究のねらいが明確である」などの明細があって、該当するところに○がある。

○が多ければ多いほど優秀。

そしてもうひとつ、「出品票」というのがある。学校と名前とタイトルとジャンル（化学とか物理とか植物とか）などの基本情報。で、気になったのが「指導事項」で、要するに大人が手伝ったらそのことを具体的に書くようになっている。

一応中学生の子どもがいるため中学校から見始めた。もちろん、「指導事項」の欄はほとんどが空白だ。

さて、と小学生の方を見始めた。こちらは指導部分に必ず文章がある。中にはびっちり書いてある。つまり、「大人」が思い切り手伝っている。そうするとどうなるか。

そう、小学生の研究の方が「すごい」のだ。

展示されている研究のほぼすべてで、大人が力を貸し、それがストレートに影響しているのがものすごくわかる。

なんとなくこの手のものは「大人が手伝うことはあまりよくない」イメージがあるが、科学的知識のある大人がしっかり指導することは、ある意味「授業」とまったく同じだ。大人が指導することで、子どもが、さまざまな実験や観察など生き生きと「自由研究」している。

もともと「科学」は日常生活そのものだ。この世界（自然界）がどうしてこうなっているのかを説明できる学問、たとえば「空はなぜ青いの？」とか。そんな疑問を、親子で解いていくという素敵なチャンス。

私の場合、「自由研究はめんどくさい宿題」という意識から抜け出せなくて、自分でやらなくちゃいけないところをやってやるんだからと適当に手伝ってしまっていた。

そんな自分が悔やまれる発表会だった。

草加宿場まつりはミニテーマパーク

10月6日（日）は「草加宿場まつり」。草加駅の東口周辺、東口ロータリー・旧日光街道沿い・草加小学校内でさまざまなイベントが開催された。

今年は、去年のような目玉（草加育ち体操選手や埼玉県警音楽隊のパレード参加）が無く、御神輿も無いので、実はちょっと心配していた。

が、その心配は無用だったように思う。

もちろん訪れた人数などは去年に及ばなかったかも知れない。けれど、朝からてくてく歩き回って、なんだか楽しかったのだ。たぶん、学校から帰ってすぐにお祭りに向かった娘も、お友達と楽しく過ごしたんじゃないかと思う。

今回のコンセプトは「和」。小さなイベントをたっぷり詰まっている「宿場まつり」というまとまり。

この、ちょっと楽しい小ぶりのイベントが複数あるってことでイメージしたのが、「ミニテーマパーク」。

パンフレットには「宿場まつり」の細かいイベントがたくさん書いてあるのだが、「草加宿場まつり実行委員会」が主催しているものだけではなく、旧日光街道沿いの自治会や町内会や、草加ミュージックフェスティバル実行委員会、草加市教育委員会など、主催者が違うことがわかる。

街道沿いには、フリーマーケット、ジャズや太鼓演奏、大道芸、食べ物の露店（模擬店）、お餅つきの実演販売などが開催されていて、ときどき足を止めて見入ることができる。食べ物は、お祭りに定番の露店だけではなくて、自分のお店の前で商品を買っているところも多い。「粉もんや三郎」の焼きそばは行列ができていた。

また、草加小学校内では、太鼓と音楽演奏、時代行列で最後を歩いていた「忍者」による殺陣演技と、奥の細道物産店。去年も食べたけれど、栃木県の揚げゆばまんじゅう美味しいんだよ。昭和村ブースでは赤カボチャが目の前で煮込まれていた。

駅前ではウルトラマンギンガショー、音楽やダンスの他、瀬崎中学校家庭科部による野点もあり、浴衣姿の中学生がおもてなし。

街道沿いの6地点では「草加宿町角ライブ～六丁物語～」のステージがあり、ジャズをメインに、アカペラ音楽と、ベンチャーズやチェッカーズなど多彩な楽曲が流れる。また、別の6地点では、市内の太鼓クラブによる太鼓の音が響く。

市役所方面の道では、「はいから横丁グルメ市」という、国際村一番地のグルメ+αで、私のお昼ご飯はここだけでバラエティに富んだ食事ができた。休憩スペースもあって、親子連れも多か

った。

そして、神明庵と藤代家住宅店舗には、ハーブとフルーツによるミニコンサート。

「草加・レトロ写真館」は、小さいスペースだったけれど、昔の草加駅などの白黒写真が何十点か展示されていた。「私が引っ越してきた頃こんなだったのよ」と写真を説明してくれる初老の夫人に「私が来たときはもう今の駅でした」と返事をしながら、地域のイベントっぽくていいなとほっこり。

実は同じ日に「中央公民館まつり」が開催されていて、各種模擬店と中央公民館にあるサークル発表会でこちらも賑わっていた。トリを飾っていたのは「保育魂」という、男性保育士による太鼓演奏。力強い響きに思わず足を止める。

地域のお祭りの集大成、地元の人がゆったり楽しめる、素敵な「お祭り」だった。

ウォーターフロントおひろめと「チャリティよさこい」

10月14日体育の日は、「草加スポーツフェスティバル」の日だ。

草加市内の体育館や運動場、プールなどでさまざまな市民向けのスポーツ行事が行われた。メイン会場となる綾瀬川左岸広場では、浦和レッズや「ラダーゲッター」「ヒューストン」などのニュースポーツ、「スピードガン」や「スポーツクライミング」などのコーナーがあって、賑わっていた。

だが、私が居たのは、綾瀬川に面するウォーターフロント。

左岸広場から綾瀬川に沿って左、草加方面に抜けていくと見えてくる川縁のステージだ。ここでは、『越谷市竜巻災害復興支援 チャリティーYOSAKOI』が開催されていた。

次号、イベント用臨時増刊号の表紙を、よさこいの「旗の競演」にしようと撮影に訪れていたのだ。

実は、このウォーターフロント、このイベントが「こけら落とし」だったとのこと。

行ってみて、これはイベントするのにかなりいいところかもしれないと感じた。川側にステージがあって、ゆるやかな芝生の土手がある。野球場の外野みたいだ。そこに各チームの踊り手さんたちが、チーム毎に集まって、思い思いのスタイルで座っている。

観客も座ってのんびり応援。真ん中の階段にはカメラマンが陣取り、一眼レフを構えている。小さな子どもたちが、人の間を走り回る。

背後では防災公園建設工事が進んでおり、工事現場を仕切る壁がちょっと無粋に並んでいるが、これが完成したら、けっこう素敵な空間になりそうだ。

ちなみにウォーターフロント、現時点でGoogleMAPの方には描かれていないが、航空写真ではばっちり映っている。

※GoogleMAPで「35.83946,139.80655」を検索

草加市と「よさこい」の関係については、今月末に発行予定の「草生人臨時増刊号」にて「草加市よさこい振興会」の方にインタビューしているので、そちらでどうぞ。

PDFファイル：バックナンバーページ <http://www.asymos.com/soseijin/issue/>

「市展」へ（また）行ってきた

10月25日、アコスホールで開催されている「市展」、「草加市美術展」へ行ってきた。31回目の今回は、市展の功労者であり、主催者である草加市美術協会の設立に尽力された故米重忠夫画伯回顧展も同時開催。

市展は、草加市に在住、在勤、在学、公共施設を活動の拠点としている文化団体（公民館や文化センターなどで教室などを開催している場合だと思われる）に所属する、16才以上の人が応募できる美術展だ。毎年この時期に開催され、展示されるのは入選作のみ。そのなかで優秀な作品には、「美術協会賞」「草加市長賞」「議会議長賞」などの賞が与えられている。

スペックはさておき、去年にひき続いて行ってきて思ったこと。市という単位で、毎年これだけの作品が出てくることは、普通なのだろうか。これでも出品数が少ないと嘆く審査員の言葉が、市展のパンフレット（カタログ）には掲載されている。

さて、初めて見に行った去年は、これはいったいだれが描いているんだろうとちょっと不思議に思った。だが、今なら分かる。市内にたくさんある美術や書道や写真の教室・サークルの人たちの、発表の場なんだなと。で、ここに見に来る人のほとんどは、同じ教室・サークルの人と、そのお友達なんだろう（年齢層が高いのだ）。

カタログには年齢が書かれていないが、たぶん若い人は多くないのではないだろうか。

そういえば、市内の中学生や高校生の作品は、校内で選ばれたのが市内の何かで金賞をとり、それで県に行ってなんとか賞を取った、というようなニュースを校内のお手紙で知るのだが、これは「市展」とはルートが違っているのだろうな。学生が学校で描いた作品は、たぶんここには登場できない（未確認）。

何か、もったいない気がする。アートな世界は年齢は関係ないはずだから。

そういう意味では、「写・ド・ラペ展（第2回目は草加松原美術展）」は、年齢も所属も何でもありで幅広い、その点で画期的なのかもしれない。

やっぱり、美術館みたいな公的なちゃんとしたアートな空間が欲しいなと改めて思った。

「ふなっしー」で大騒ぎ

10月27日、草加駅東口は騒がしかった。朝早くから草加駅東口のヨーカドー前に行列ができ、8時半にはすでにヨーカドーを半周。いったい何だ、と思われた方も多かったかもしれない……。

これは、草加のインターネット放送局「草加元気放送局」が主催する『草加元気広場 ご当地キャラ夢の共演 in 草加』を見るために集まった人々だ。今人気絶頂ともいえる ふなっしー が来るというので大変なことになっていた。

最初に発表されたときは、カーソン広場、つまり駅前で行うイベントだったのだが、ふなっしー 一人気が絶頂のタイミングに重なってしまったために、混乱をさけて整理券発券+アコスホールに変更された。朝の行列は、その整理券を求めて並んでいた人だ。

私は、主催者が先日取材させていただいた「草加元気放送局」さんだったこともあり、報道関係者（草生人の記者(^_^;)）として、第1回目取材させていただいた。

ありがとうございます。

イベントは、参加したゆるキャラの自己紹介（ふなっしー以外は自分でしゃべれないので、マネージャー的な人が解説）がメイン。30分ほどで短く感じたが、あのデカイ着ぐるみを着ての演技は、30分が限界のような気もする。このイベントは、「草加元気放送局」と同様インターネット放送をしており、1回目と同じアコスホールで行われた3回目を「UstreamLIVE」で見た。最後だってことでゆるキャラたちが通路を歩き回って

いて、観客の喜びようは凄かった。いやー本当にふなっしーってよく飛ぶんだね。。

しかし、これだけの大がかりなイベントを、1か月ほどの準備期間でやりとげてしまったのは、本当に凄いと思う。会場で忙しく走り回る主催者の安藤さんは、スタッフに指示を出し、司会もこなし、かっこいいの一言につきる。本当に大変だったろうな。

会場では、「草生人」を通じてお会いした人、お世話になっている人に大勢出会った。

草加のキーマンがたくさん集合していたってことになるかもしれない。

※草加元気放送局

<http://sokagenki.tv/blog/>

放送バックナンバー：「草加元気広場」第1回目・第3回目が見られる

1回目（初回）：<http://www.ustream.tv/recorded/40219867>

3回目（最終）：<http://www.ustream.tv/recorded/40225561>

■起業日記その4：最初の「草生人」を作るまで

前は番外編ということで道具について書いたけれど、今回はその3の続き、最初の「草生人」を作った時のこと。

会社を作った時点で、とにかくフリーペーパー（無料）のタウン誌を作ることは決めていたから、とにかくどんなタウン誌にするのか、いろいろ考えてまとめ、まずは最初の号を作ることからしなくちゃならない。

どんな人たちに向けて、どんな内容で、どんな冊子の形で（大きさとページ数とか）、何部刷るのか。

もともと、広告メインのタウン誌ではなく、情報優先の、生活するために自分が知りたいことがちゃんと掲載されている「タウン誌」が欲しかったから、そのイメージや具体的な仕様は割とすぐにまとまった。

企画書の最初には、「ちゃんと読めるタウン誌」を作りたいと書いた。

1) タイトル決め

まずは雑誌のタイトル。

タイトルは「草加」の草を入れることは考えていた。「草加〇〇」というストレートな形で言葉を入れて見たが気に入らず、今度は「草」だけを残すパターンを考えた。そこで浮かんだのが、『草加で生活するための話題』→「草生活」。そして、『草加で生活する人』→「草生人」だ。

「そうせいじん」という音は覚えやすい。娘に最初に言ったらソーセージ？と聞き返されたが、間違えやすい用語があるということは逆に、一度聞けば忘れにくいことにもなる。

これでいくことにした。

で、今は「草生人は『草加で生きる人』です」ということにしている。生活している人ではなく。

なぜかというところ、「生活する」という言葉が、草加以外から働きに来ている人、草加に深く関わっているけれど住んでいない人を含めない感じがしたからだ。

もっとトータルに包括的な意味を持たせたいってことで「草加で生きる人」。

2) 企画決めと取材、執筆

最初の特集は、書店と決めていた。

書店で働いた経験があったこと（インタビューしやすい）、近所に書店が少ない、そして、『本屋さん』が大好きだから。すでに自分の中で、書店が減っていることに危機感があったし、なぜ「現実の本屋さん」なのか、いろいろ言いたいことがあったから記事にしやすかったと思った。

ただ、今振り返ると、それぞれの本屋さんにはよく実態の無い「タウン誌」の取材に応じてくれたなあと思う。そのおかげで、今まで続けることができた。本当にありがとう。

実は、一番最初は、巷のタウン誌的に、書店だけではなく他の店もたくさん紹介しようと思っていた。草加のスイーツとかお勧めランチとか調べていた。

が、各書店への取材、一覧地図作成のためのデータ集め、「元気人」インタビューと、これだけで仕事量的にかなり負担になることが判明。また、企画段階では1ページに数軒入る予定だった記事も、実際には文字数が足りないこともわかった。せっかくインタビューした内容を、スペースが無いといってごっそり削ってしまうのはイヤだったのだ。

というわけで、『特集+イベントレポート+元気人インタビュー』というパターンができあがった。

3) 広告取り：中止！

もともと、「広告に頼らないタウン誌」にしようとしていたけれど、まだ他に収入源を作っていなかったから、印刷代+αくらいは「広告」でまかなおうと考えていた。

他のタウン誌などを参考に価格を見積もり、なんとかいけるだろうと思っていた。

が、ものすご〜〜〜く甘かった。

ブツが無いのに広告が取れるほど、世の中は甘くない。

まあこれについては「そりゃそうだ」と2件打診したところですぐにあきらめ、その後は「今後の広告を得るためのパイロット版」という位置づけで制作することにし、広告のスペースを取った。

しかし、「広告スペース」という枠のままにするわけにもいかないから、娘が大量に撮影していた草加の写真から気に入ったものを掲載してみた。

(これが意外に素敵だったので、その後、草生人のfacebook写真集として記録することにした)。

4) 印刷はご近所で

さて、中身ができたら今度は印刷用データの制作。

細かい話はさておき、今ネットにたくさんある「激安印刷屋さん」から、適当なところを選ば

なければならない。いろいろ探したが、結局以前利用したところのあるところを決めた。

それは「東京カラー印刷」。

Webサイトでの広告が凄いので、ご存じの方も多いただろう。

ここの最大の利点は、印刷所が北千住にあることだ。通常、ネットを使った印刷所の場合、校正（印刷にミスが無いかを確認する作業）は郵送となって、どうしても1日余分にかかる。しかし、北千住なら直接印刷所に行って確認して、その場でGOサインが出せるのだ。トラブルがあった場合でも、直接行って対応できる。

さて、最初のネットでの納品はものすごく緊張した。

社内で校正用に印刷して、何回も何回も確認したはずなのに、しっかり間違えていた時には本当にがっかりした。

以前編集仕事していたときにも、なぜこんな大勢で確認しているのにタイトルみたいなでかいところの間違いを見落とすんだ、という経験があったから、まあ仕方が無いのかもしれない。人間は間違える生き物だ。

こうして第1号、創刊準備号が完成した。

ただ、これからが苦難の始まりだった……………。

■起業日記その5：インターネットをどう使うか

前回、「これからが苦難の始まりだった」で終わって見たが、この「苦難」は、はっきり言えばマネタイズの失敗だ。

「読めるタウン誌を作ろう」という理想を掲げて始めたときには、「マネタイズ」、要するに利益を得ることについては漠然としか考えていなかった。ともかく始めないと何も見えてこない。見えてこなければ具体的な事業などを考えればいだろうと。

まあ、甘い。

で、その失敗談というか、ずるずるとヤバイ状況になっていったことを書くつもりだったが、その前にインターネットの利用について、まとめておくことにする。

1) ともかく「Home」を作る

紙媒体のタウン誌を作ると決めたが、もちろんインターネットも同時に利用することは考えていた。会社自体の存在は告知するために、とりあえず会社ドメイン（asymos.com）を取ってURLとメールアドレスを設定した。いわゆるレンタルサーバのサービスを利用。

次に「草生人」の「ホームページ」の製作だ。こちらは、以前会社でいっしょに仕事をしたことのある知り合いにお願いすることにした。私より先に会社をやめて独立したプログラマーさんである（ただし、独立して始めた仕事は「プログラマーさん」ではなく、「電子楽器屋さん」である）。彼に1週間に1日来社してもらって、話し合いながらページを作ることにした。

ただ問題は、その時点でどんなページにするかまとまっておらず、試行錯誤で作っていったことだ。

また、最近のトレンドとして「WordPress」※1で作ることにしたが、私自身が知識不足で、うまく使いこなせない、というか、WordPressがどういうものか、利点と欠点や機能の有無などをよく理解しないままお願いしてしまった。

それが今の「ずっと『とりあえず』状況」を招いている……。

と、今の状況を書くところじゃなかった。

で、まず「草生人って何？」と思った人が検索したら表示されるページ、というのを作った。最新号の内容紹介と、「草生人」記事にかかわりのあるお店や会社や団体などのURL（サイトアドレス）の一覧。

しかしいつになったら「とりあえず」がとれるのかな……。

2) メルマガ発刊とダウンロードページ

さて、本誌の広告がなかなか取れない、と、これはある程度わかっていたことではあった。部数が少なく、認知度も低い状況では、「広告」をお願いすることは難しい。

次号を出す時点では、取材先の人に「協賛をお願いする」という形で広告を出してもらった。取材して宣伝してくれたからそのお礼ね、的な。以前からの知り合いにも声をかけた。

しかし、これでは焼け石に水で、当初考えていた印刷費さえ出ない。

そこで考えたのが有料メルマガだ。メルマガ最初の発行日は2012年10月。

このあたりの経緯は、ブログにも書いた。

「草生人メルマガ」の切ない事情(:_;)」

http://someiyoshino.way-nifty.com/soseijin/2013/03/_-9426.html

費用の面だけが前面に出ている内容ではあるが、実際にはこぼれたコンテンツをどうにかできないかなと思った部分もある。「草生人」は毎号、企画して取材して原稿を書くという作業を繰り返しているわけだが、取材した内容が全部誌面に載るわけではない。文字数に合わせて削除して載せられなかったネタを再利用、じゃない、利用しようとしたわけだ。「もったいない」の精神である。

まあ、有料に設定してしまったことは、ちょっとその精神に反するような気もしないでもないが。

で、ただ単に有料メルマガを出しても誰も見向きもしないだろうと考えたので、ひとつサービスを考えた。

「草生人」のPDFをダウンロードできるようにして、最新号のみパスワードを設定し、それをメルマガ読者だけに教えるというサービス。「草生人」は発行部数が少ないので、そのフォローのためにPDF版を配布することは初めから考えていたが、それをメルマガとくっつけようとしたわけだ。

しかし、これは認知度が低すぎてまったく話にならなかった。メルマガの読者が少なくて役に立たない上、最新号がダウンロードできない、というマイナスな印象を与えることになってしまった。

今は全部ダウンロードできますよ、はい。

3) その日の仕事はツイートから

メルマガとほぼ同時に始めたのが「ツイッター」だ。

こちらは、草加のイベントをある程度選んで毎日つぶやけば役に立つかなという感じで始めたものだ。

「草生人」はどうかんばってもリアルタイムのイベントを知らせることはできないし、メルマガも有料にしてしまったため「草加市民のみなさんにお知らせ」という役割が果たせない。

ただ問題は、フォローしてもらわないとダメという点だ。

フォローした人よりもフォロワーが少ないのでは、やはり「草加市民のみなさんにお知らせ」は難しい。もっと宣伝して、たくさんの人にフォローしてもらわないと。。

実は最初は「草生人Webページ」のお知らせにその機能を持たせようと考えていた。

しかし、『WordPressでの更新』が思った以上にめんどくさく、トラブルの元になりそうだったのでやめた。

WordPressは高機能だから、いろいろなことができるようになっている。その分、シンプルな更新にもある程度の手順が必要となってしまう。手順が多いとミスも発生しやすい。

まあ私が「めんどくさがり」なんだろうとは思うけど、ツイッターがシンプルで楽すぎるのよ。

今は、ツイッターの画面を埋め込むことができたので、それでなんとか「お知らせ」的なことをWebページでも発信できている。

ただ、「お知らせ」も併記しているからなんだか収まりが悪い。

今それについては考えてるところ。

4) Facebookを何に使うか、それが問題だ

インターネット活用といえば今は「facebook」がトレンドである。

.....という流れが去年あたりからあったので、草生人のfacebookを作ろうと思った。

だが、すでにツイッターにお知らせ機能を持たせてしまったため、こういった形で展開するか悩む。同じこと（お知らせ機能）をしても意味が無いし、認知度が低いのに「ユーザーとのコミュニケーション用」なんてことも無理。

facebookでやりやすいことは何か。

そこで思ったのが、写真掲載だ。

広告枠に入れていた草加の写真、写真好き娘が撮りだめた草加の写真と、取材時にたくさん撮影した写真の中から、これは、と思う写真をほぼ毎日載せることにしたのだ。

1枚の写真+ちょっとした解説しかないという不思議なfacebook。本誌の宣伝も入れたが、写真+少しのテキストという形をくずさないようにしてみた。

ただ、最近ちょっと写真掲載が少なくなっているのは反省点。毎日更新という形を復活させた

いな。※2

※1 WordPress : PHPで開発された、オープンソース（誰でも使える）ブログソフトウェア。CMS（コンテンツ管理システム）としても利用されている。要するに、基礎を作っておけば、HTMLのことがわからない人でも更新できるというシステムを作ることができる。

※実は「写真好き娘」の写真が減っているのだ。中学生になり、町をうろつく時間が激減し、新作が少ない状態になってしまったのだ。掲載する「いい写真」の背後には、何百枚という写真がある。facebookの写真がそれなりに見えるのは「選んでいる」から。

●日本製造業コマ大戦

『草生人』の特集「草加のすごい企業」で、ねじ工場、浅井製作所に取材に行った際、社長の浅井さんが一番熱く語っていたのは、コマのことだった。どうやら浅井さんだけでなく、今、日本中の中小製造業の経営者や技術者たちが、コマのことで熱くなっているようだ。「日本製造業コマ大戦」のコマのことだ。

「日本製造業コマ大戦」とは公式サイトによると……、

「全国の中小製造業が自社の誇りを賭けて作成したコマを持ち寄り、一対一で戦う大会です。」

小さい土俵の上で2人が自分のコマを同時に回す。2つのコマがぶつかり合う。いわゆる「喧嘩コマ」。

ルールは、「直径20mm以下!! あとは材質・重さ・形など一切問いません」。

非常にシンプルなルールなので、コマそのもののポテンシャルがむき出しになり競争にさらされる。材質や形状が勝敗を決する大きな要因。つまり工場の設計能力や加工技術の優劣が問われるのだ。ガチンコ勝負。燃えないわけがない。

2012年に第1回大会が行われ、第2回大会も全国各地の予選を経て2013年2月に開催された。参加者の数がどんどん膨れ上がっている。

浅井さんはインタビューの最中に、第2回大会で岐阜県から出場して優勝した「チームシオン」のコマ（浅井さんが購入したレプリカ）を回し始めた。

コマはただ静かに立っていた。

「これ止まっていますよね？」

「回っていますよ！」

日本一の投げ手が回すと7分以上回るのだという。

「これ見るとみんな喜ぶんです！これが町工場の技術です！」

インタビュー音声を聞き返すと、それからしばらくしてまた「あれ？ これ止まっていますよね」「回っていますよ！」が繰り返されていた。

浅井さんのfacebookに、とうとう自分でも作ってしまったコマの写真が掲載されていた。

※「日本製造業コマ大戦」公式サイト。

●下町ボブスレー

浅井さんへのインタビューの中で、ボブスレーの話題が出た。大田区の町工場、約40社が一丸となって、2014年のソチ五輪ボブスレー日本代表の公式マシンを作ろう、というプロジェクトが進行しているというのだ。

ボブスレーはヨーロッパではレーシングカーに似た開発競争が繰り広げられているようで、そこに挑む大田区の勇気とプライドは日本中の町工場からの賞賛と支持を集めている。

浅井製作所の外壁にもポスターが貼ってあった。ぜひ成功して、大田区の、そして日本の町工場の底力を世界に知らしめてほしい。

※「下町ボブスレーネットワークプロジェクト公式サイト」

<http://bobsleigh.jp/>

『草生人』本誌では、商工会議所常議員、小俣克彦さんへのインタビューもある。草加市内の工場からの部品の組み合わせで、何か新しい製品を生み出せるかもしれない、という話題が出た。

「だれかまとめる人がいれば絶対できます」と小俣さんが言っていた。

さあ、草加の町工場はいったい何を作るだろうか。何か作ってほしい！

じつに彰の草加小話：「100円商店街」のワークショップ

10月11日（金）の夜、草加駅付近の商店の店主たちが公民館の一室に集まり、「100円商店街」の勉強会に取り組んでいた。

来る11月24日、草加小学校の校庭で開催されるグルメイベント「街グルin草加2013」と同時開催で、草加小学校正門に通じる旧日光街道沿いの商店街にて「百縁商店街（草加版100円商店街）」が実施される。

その企画を成功させるために、「100円商店街」の発案者で、日本各地の商店街の興隆のために尽力している、特定非営利活動法人アンプの理事長、齋藤一成氏を講師に招き、勉強会が行われたのだ。

「100円商店街」とは、商店街全体を1店の100円ショップに見立て、全ての店頭に100円コーナーを設置するという企画だ。山形県新庄市で9年前に初めて実施され大成功を収めた事例を皮切りに、全国100を超える商店街で繰り返し行われ、通りに賑わいを取り戻す実績を積みつつある。

齋藤氏は100円商店街を成功させるための三か条をあげている。

その1、100円商品は必ず店頭に陳列する

その2、必ず店員が外で接客する

その3、商品は必ず店内で精算する

お客さんは店頭で100円の手軽さで商品を手に取り、お金を払うために店内に入り、おやこんな商品もあるぞ、なかなかいい店かも、と気づき、購買欲がそそられる、という段取りだ。

もっとも成功させるためには頭をかなりひねらなければいけない。

店頭に並べる100円商品はなんでもいいのだが、魅力的な商品でなければ手に取ってもらえない。

自分の店の商品である必要はない。ただ売るだけでなく体験してもらうような仕掛けも工夫できる。どんな言葉で表現するかも大事だ。従来の考え方から自らを解放して、自由な発想をめぐらさなければ魅力的な商品は思いつかない。

この日の勉強会は、商品を考えてみよう、というワークショップであった。

4人ずつ4グループに別れて、齋藤氏から与えられるテーマで知恵を絞り、意見を出しあった。

こんな進め方だった。

1グループごとに、まず1人が自分の店で出す100円商品のアイデアを出す。それに他の3人がいろいろ言う。5分で交代。2人目の人がアイデアを出し、残りがいろいろ言う。同様に3人目、4人目も続ける。

一巡したら、テーマがちょっと変わる。

「次に、ばかばかしくて思わず笑っちゃうような100円商品のアイデアを出してください」

また1人ずつアイデアを出し、残りの3人がわいわいと口を出す。それを順繰りにやり合う。

一巡するたびに齋藤氏から新たなお題が提出される。

「体験できる企画を考えてください。つかみ取りとかジャンケンとか」

「お母さんが買いたくなるようなキャッチフレーズを」

「おじいちゃん、おばあちゃんが買いたくなるキーワードは？」

「子供が買いたくなる仕掛けは？」

「独身で未婚のカップル向けならどんなデコレーション？」

「あなたの趣味、特技、好きな食べものから発想すると？」

など、テーマをずらしながら、思考のトレーニングを積み重ねる。会議室に大声や笑い声が飛び交う。

脳みその回転速度をあげろ、と齋藤氏は言う。店主たちが出すアイデアが100円商店街の命なのだ。

よさこいでまちおこし、ローカルアイドルでまちおこし。今いろいろな人が頑張っており、なるほど街に客が集まってきているかもしれない。だが、店内に入ってくれるだろうか。

100円商店街は、街に人を呼び、さらに店内に引き入れるために有効な直接的な手段として注目されている。

100円商店街は、特定の実行委員の尽力や行政の援助に命運を預けているのではない。あくまでも、個々の店の商品アイデアが勝負。自分の責任で客を集める。自分の努力が街を活性化する。

東松山市で実施された100円商店街のチラシを見た。通りの地図にびっしりと店ごとの100円商品のキャッチフレーズが詰め込まれて、楽しさと力強さが伝わってきた。たとえば……。

- ・文林堂「100円のぬりえを買ってお店に展示」
- ・親和モータース「壊れたトラブル見つけます！愛車のコンピュータ診断100円/1台」
- ・いろは整体院「じえじえじえ！超～痛い足ツボで倍返しだ！」
- ・東松山警察「コドモ警察！ミニ白バイにちびっこコスチュームで写真撮影」
- ・ストアーマナカ「大好評 野菜の詰め放題」
- ・ペットショップさわだ「小型犬の爪切り100円でします！」

このワークショップの経験が活かされ、きっと草加の「百縁商店街」に楽しくて思わず手にとってしまうような商品がずらーっと並ぶ姿が見られるにちがいない。

※「NPO-AMP | 特定非営利活動法人アンプ 100円商店街公式サイト」

<http://www.npo-amp.com/100yen>

奥付

草生人メールマガジン2013年9・10月号

<http://p.booklog.jp/book/77324>

発行元：ASYMOS

発光元プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asymos-yoshino/profile>

編集・発行責任者：ASYMOS 染谷洋子 someiyoshino@asymos.com

※本メルマガに掲載される記事の著作権は発行元及び発行責任者に帰属します。

© 2013 soseijin ASYMOS.INC

※記事の引用、転載のご希望がある場合は、記事によって取材先の許可が必要な場合がありますのでご連絡をお願いします。

※メルマガの内容に関するお問い合わせは：asymos_info@asymos.com

もしくはこちらへ：<http://www.asymos.com/FormMail/iken/FormMail.html>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77324>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77324>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ